



発行人 藤井 信吾

◆発行 行 取手新時代をひらく会  
◆発行責任者 池田 徳光

◆URL http://www.fujii-shingo.com E-mail:hirakukaishingo@ybb.ne.jp  
◆事務所 〒302-0004 取手市取手2-14-24 竹内ビル2階 TEL&FAX:0297-72-5616

## 第13回「藤井しんご支援者の集い」開催

6月2日取手ウェルネスプラザにおいて藤井しんご支援者の集いが開催されました。  
多数の来賓をはじめ支援者が一堂に集い、皆様から感謝と激励の言葉をいただきとともに藤井市長より市政報告があり、取手の次のステージをひらく決意が表明されました。



市政報告を行う藤井市長



来賓の祝辞を受ける出席者の皆様

## 民間事業者とも協働して 取手の次のステージを拓く

〈関東鉄道沿線、  
取手駅西口、桑原地区の未来〉

取手市長 藤井 信吾

### ◆関東鉄道常総線乗降者数から見る人の動き

平成17年(2005年)8月のつくばエクスプレスの開業によって、通勤・通学に人の流れが大きく変わり、取手駅を使って常総線から常磐線へと乗り換えていた利用者の相当数が守谷駅でつくばエクスプレスを利用するようになりました。通年比較でTX開通以前の平成16年と開業翌年の平成18年を比較すると取手駅利用者数が2万7千77人から1万5千594人へと1万1千483人減少している一方、守谷駅利用者数は、2千590人から1万35人へと大きく増加しています。平成23年には守谷駅利用者数が取手駅利用者数を上回り、平成29年には取手駅利用者数、1万1千332人に対して、守谷駅利用者数は1万5千630人と4千298人、守谷駅利用者数が上回る状況となっています。

しかし、取手市内の関東鉄道各駅利用者数を合計してその数を見ますと、底となった平成23年と比較して平成29年には、1千950人増加しています。ゆめみ野駅周辺に住宅取得された方の通勤・通学でのプラスが主要因と考えられますが、西取手駅、戸頭駅は底であった平成23年からかなり戻していることを踏まえると沿線事業所へ通勤される方の数が増えていることも数字を押し上げている一因と思われまます。

### ◆新規事業所開設による「勤労者」の増加

定住者の拡大はもちろんです。取手にある事業所が新規に開設されたり拡大されたりすることで、日中の勤労者数が増加することも市の活力を上げていく上で大切なことです。

### 〈ゆめみ野地区〉

ゆめみ野地区では、新規事業所の開設や拡大が続いています。平成25年7月に進出した伊藤ハムは、63億円の投資をしていたが、第一期の工場を操業していましたが、このほど第二工場が竣工し7月には第二工場が稼働します。第二工場の建設費は50億円と聞いています。

従業員数の面でも、現在、直接雇用160名、派遣社員50名の雇用があり、取手市民の雇用が80名を超えるようですが、第二工場の稼働に伴い、30名の雇用が拡大するそうです。

30年3月には、日本リーテック株式会社の総合研修センターもオープンしました。この会社は、鉄道電気設備や交通信号機といった道路設備等を主要事業内容とする東証二部上場企業です。敷地内に在来線の線路や新幹線の線路、さらには、駅ホームやトンネルも配置してあり、これから研修を通して様々な設備を充実させていくそうです。設備や什器を含まない建設費で34億円の施設だそうです。

### 〈市役所周辺〉

前田建設工業株式会社が、ゴルフ練習場の後に、新技術研究所を建設中です。平成30年11月頃オープンと聞いています。建設費、実験設備を合わせると110億円の投資となることとです。社員が80名、関連社員が40名とのこととです。

5月中旬に関東鉄道から発表されましたが、関東鉄道寺原駅には現在の北側の駅舎に加えて、線路の南側(市役所周)に新たな改札口が設けられ、県道までの誘導路も前田建設の費用負担において整備されます。また、取手市と建物の売買契約、土地の賃貸借契約を結んだ旧白山西小学校跡地においては、人材開発センターを新設予定とのことと、現在、設計に当たっているということとです。

企業の研究所や研修所が市内にできることは、まずは、関東鉄道の利用者が増える、取手駅に降り立つ人が増える、関連するサービス需要が広がるということからも大きなメリットがあります。

### ◆民間事業者の取手進出対応で取手の次のステージを

この先、取手に大きな民間進出計画があります。

### ① 取手駅西口A街区再開発事業

昨年末に市街地再開発事業に豊富な実績とノウハウを持つ事業協力者が選定されましたので、今後、事業協力者の技術的な助言を受けながら、駅前の利便性を高め、人の交流やまちの活力を創出する事業計画が進展していくよう万全の態勢でバックアップしていきます。

### ② 桑原地区区画整理事業

地権者の皆さんにとっても、農業経営に代わって安定した土地活用が可能になるというメリットもありますし、大型商業施設が開設されれば数千単位での雇用が見込まれ、若い世代の定住化も促進されることと思います。さらに、68ヘクタールという大規模な商業事業用地が開発されることにより、市にもたらされる固定資産税を初めとした税収は財政運営上大きく貢献することになると期待されることとです。5月中旬に行われた地権者と市、事業協力者(イオングループ)の集会では、前向きな意見が活発に出てきていました。「民間の力」も得て、「躍動する取手」への地歩固めをしつかり行っていく予定です。

### ◆将来展望に見落としえない大切な視点

〈外国人訪問客の著しい増加により、外国人需要が取手を含む郊外部に広がる!〉

長い間、人口減少とデフレに苦しんできたため、バブル崩壊後は長期的な需要減少が続くと私たちは思い込んでいますが、人手不足と猛スピードで進む国際化により、サービス業ではデフレは収束していると認識を改めるべきです。都心部においてはホテルもレストランもどこも外国人で満員という状況ですが、この動きが周辺部にも及んでいきます。取手周辺も景色が急変する可能性があります。取手駅の西口の再開発や桑原地区での区画整理事業も、この環境変化を先取りする形で備えが必要です。

外国人旅行客数は、平成25年には1000万人であったものが、1400万人、1900万人、2400万人と毎年急速に増加し、平成29年には2900万人となっています。2030年には、8200万人が入り込んできます。当初は、外国人の訪問先は定番の有名観光地でしたが、リピーターが増えるにつれ、彼らの滞在先がふつうの日本人が過ごしている日常生活の領域にまで入り込んできています。

ルース・ジャーマン・白石氏(ハワイ生まれリクルート社を経て経営コンサルタント)の講演では、平均単価3800円の江の島アイランドスパ(温泉のある日帰り入浴施設)が、外国人を積極的に招き入れ、1回3時間の滞在で2万円を消費してもらう顧客を月400名上乗せしようといった現実的な計画を紹介しています。

〈外国人訪問客の増加は国策でありオリンピック終了後も増え続ける〉  
成田空港の3本目の滑走路(3500メートル)の新設、

B滑走路の延伸(2500メートルから3500メートルへ)、運用時間の拡大が決まり、外国人訪問客流入の環境整備が続きます。

◆遊び方にも、「イノベーション」が求められる時代

遊び方、時間の使い方にも、イノベーションが求められる時代、桑原地区に新たな商業空間が形成されるにしても、従来の「イオン」のイメージではなく、「コト消費型」のテーマパークとして、あらゆる年代層を楽しませる独自性のある施設が人知を尽くして提案されることになると思います。

68ヘクタールという東京近郊では得難い広大な面積(越谷レークタウンの2倍)の中に、「来て、見て、体験する新たな取手」が描かれようとしています。

まずは、地権者の皆さんの様々な考え、思いを一つにまとめていく丁寧な作業が続けられて、区画整理準備組合が設立されることが前提ですが、次代を拓く大きなプロジェクトであり取手市民にとっても、ますます期待が高まってくるものと考えており、万全の体制でバックアップしていきたいと考えています。



出席者同士の談笑



議員代表挨拶をする入江市議会議長



若林後援会会長の開会のあいさつ



取手新時代をひらく会会旗



参加者と交流する市長夫人



来賓と会話する藤井市長

「藤井しんご支援者の集い」参加者の感想

市内在住者より集いに参加して様々な感想を寄稿いただきましたのでご紹介します。



「支援者の集い」に参加して

(取手市新取手在住) 塚本シゲ子

「藤井市長就任12年目を迎え立派に職責を勤めりーターシップを発揮されて取手市の景色も変わり市民も安心してお任せ出来る時を過ごしております。」と後援会会長の若林氏が開会の言葉をのべられました。お話を聴きながら、昭和49年12月に取手市新取手に移り住んで来た頃の事を思い出しました。引越以前は杉並区の住宅住まいで環状八号線とJR中央線が交差する騒音の激しい所でした。会社が持ち家制度を奨励し、小学四年と二年の子供連れの引越でした。一年生の長女が学校の先生の言葉がわからないと言いつ出し驚きました。担任はご年配の先生でよく方言を使われていた様です。それも今では懐かしい思い出です。今までの環境とは真逆で、シーンという無音の音が聞こえるほど静かでした。自宅から小学校までが遠く、授業参観など学校行事参加の為に自自転車に乗る練習を子供に教わり、転びながらようやく乗れる様になりました。平成19年に藤井市長が誕生した時、都内への通勤者が増え続けている取手市にも新風が吹く」とホッとしました。藤井市長になってからずいぶん変わりました。市長さんはいじめ市の関係者のおかげと感謝しております。市議会議長の入江氏のご挨拶も具体的に解りやすくユーモアがあって会の雰囲気も柔らかくなりアクセントになりました。

取手⇄東京間直通一時間という利便性を考えるとまだまだ発展の余地があり若い人達にもより魅力ある町づくりが可能なのではないかと思います。親が暮らしていた空家の処分に行っている子供世代の方々の中には市に寄贈したいと思っている方の声を聴くとか。時代の流れかも知れませんが夫婦共働き家庭が多いのが気になります。せめて6歳位までは母親が家庭に居て接点を沢山持つ親の愛で心満たされてから小学校という社会に巣立つというゆっくりした気持ちでいってほしいです。私達後期高齢者も何かをしていただくばかりでなく、一緒に考えお役に立てれば社会につながる喜びになると思います。

最後に市長のご挨拶があり取手市の発展これからの展望、明るいお話しに安心しました。大いに期待しております。市長はまだお若いのできつと応援させていただきます。

と思います。心から応援しております。食後に美味しいアイスコーヒーをいただき楽しい会に参加出来ました事に感謝致します。ありがとうございました。

躍進せよ 取手市

(取手市西在住) 塩澤 幸夫



早いもので藤井市政になってから12年、取手市は市政を続けて48年、ここ数年の変化は、TX開通の煽りを受けるという逆行にも晒されました。それにもめげず、総合的に見れば目覚ましい成果を収めたと感じています。

近年の変化と云えば市長のご挨拶でもありましたが、取手駅北西地区の開発、ウエルネスプラザやゆめみ野の開発、上新町環状道路(3・4・3号線)の完成でインフラ整備が一歩前進しました。次の期待が駅西口前や国道6号線桑原地区の商業地区開発で、写真が出来ているので、工事開始を一日千秋の思いで待っています。

これまでの施策推進は、取手のイメージを大きく替えました。街の未来を支える礎(いしづえ)となり、明日を開く財産になりました。顧みると関東大地震の復興で、当時の東京市長後藤新平氏が、道路整備・土地区画整理に壮大な計画を提言して大法螺吹きと揶揄されたが、後年、その案が如何に当を得ていたか誰しもが気が付き称賛しました。

活性化に向けての投資や市政改革、将来志向の施策の実行は如何に勇断が必要なのかを物語っています。施策の成果が一目で解るのが取手駅北西地区の再開発です。西地区全域を考へるならば再開発は道半ばですが、以前の暗く追剥(おいはぎ)や痴漢が出そうな環境は一新され拠点地区としての姿となり、次代への道筋と駅前近未来に期待が得られようになりました。

少子高齢化時代という魚目の中での取手躍進の決め手に、「挑戦」という言葉を贈ります。勇気を持つての「挑戦」と努力と速度、新事業の推進は投資額のみではなく如何なる価値が望めるか、将来を見据えて投資と見合つかの勇断をもって「挑戦」してほしいものです。

事業のコスト構成は固定費と変動費、新事業に「挑戦」する者は、保有する資金と調達できる金を生かすことが使命であり、固定費の抑制と変動費の使途、投資の回転速度を上げることを効率的運営と解釈し、藤井市長には更なる「挑戦」を期待しています。そして、市内外の人達も憧れ・住みたい取手になることを念願しています。

今後の展望に 提案

(取手市小文間在住) 玉井 崇夫



6月初旬、取手ウエルネスプラザで、第13回「藤井しんご支援者の集い」が催された。公私の二百余名が参加して、和やかながら熱気ある懇談の場となった。今年のBGMは、市長夫人のめぐみさんの選曲で「ありがとう」からの感謝を込めた名曲だった。

今回、藤井市政三期の最後の年で、来春には選挙がある。ご本人から継続の出馬表明はないが、それを期待する声も、来賓の挨拶にも、各テーブルの会話の中にも聞かれた。

この「集い」の企画進行は、応援母体である「取手新時代をひらく会」に負つて大である。私は昨年、「ひらく会」に加入させてもらって、今年2回目のお手伝いだった。「ひらく会」役員・相談役をはじめ有志一同の無欲な奉仕精神は驚くばかりで、頭が下がっている。

ところで、2020年、東京オリンピックが開かれる。この年に、取手は市制50年を迎える。しかも、藤代町との合併15年であるがあまり話題にならないようである。

そこで、提案をひとつ。古来、日本の三大河川を「坂東太郎、筑紫次郎、吉野三郎」と呼びならわされている。利根川が流域面積において日本最大の川であり、かつて取手は、その流域にある渡船場の代表的な町であった。多くの人々が取手を訪れ、足跡を残している。

その中に、正岡子規がいる。明治22年4月、本郷から水戸まで3泊4日の徒歩旅行をして、「水戸紀行」を著している。我孫子の渡し場から対岸を眺めて、「川を渡れば取手とて今迄には一番繁華なる町なり」と書かれている。そして最初に泊まったのが、藤代の旅籠「銚子屋」(現在は河原崎書店)。この「銚子屋」については、藤代町史や郷土誌等に資料が多く、その跡地はほぼ保持され、当時の面影をいどめている。

しかし、取手の渡船場については、「小堀の渡し」の船着き場があるが等閑視されているのではないかと。この郷土の歴史的事実は、今日の俳句ブームやプチ旅行ブーム、さらに地方創生の視点からも、もっと喧伝され、活性化されるべきでないだろうか。

編集後記

本号は「藤井しんご支援者の集い」特集記事として、取手の次のステージをひらく市長のメッセージとともに、参加された方からの集いへの感想と市政への更なる期待が寄せられました。

編集長 池田徳光